平成３０年度「小学校学力向上対策支援事業」及び「中学校学力向上対策支援事業」に係る

**第２回学力向上検証会議　記録**

【目的】　平成３０年度間の本県の学力向上対策の総括を行い、今後の施策の改善充実を図るとともに、平成３１年度の学力向上対策について外部有識者や各市町村学校教育主管課長等との協議及び市町村教育委員会の事例共有を通して、本県の児童生徒の学力向上に資する。

【日時】 平成３１年１月３０日（水）　１３：２０～１６：３０

【会場】 大分県庁舎本館２階正庁ホール

【内容】

**１　開会行事（１３：２０～１３：３５）**

**＜挨拶＞　大分県教育庁義務教育課長　米持　武彦**

○本年度もあと２ヶ月のここっている。伸ばせる力を伸ばして新年度へつなげる。

○とどまることなくＰＤＣＡが回転していくように。高橋先生からは、どうやって回転を持続加速できるかというお話をしていただく。大分県義務教育課の思いを伝えていこう。

○工藤教育長⇒子どもたちは未来からの贈り物。今しっかり見守り育て、未来へ返す。

学びの地図をもとに。

○３つの資質・能力をバランスよく育てる。

○新大分スタンダード　⇒　よりよい授業をつくるための要素をまとめたもの

○中学校３提言　⇒　止まることなく各中学校へ

○小中県調査の伸び、全国調査の過去最高の結果を受け、今後５年間大分はどうなるか？

（国研　千々布先生の分析）

　今年度小学校は8.3ポイントアップ、中学校は5.5ポイントアップ。

同じように上昇することが考えられる。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　今後５年間を見通して取り組んでいく。

○Ｈ２４　芯の通った学校組織　⇒　学力向上と組織力向上の歯車を両輪で回す。

○学習指導要領移行期に入り懸念されること

　・教育課程の中核である学校の教育目標を見直したか

（全面実施でよいと勘違いしていないか）？

　・カリキュラム・マネジメントの努力義務を、しなくてよいと読み替え、手を付けていない

学校はないか？

　・教育事務所の学校訪問以外の、日常の授業で、新大分スタンダードは行われているか？

　・各校長、教員はこれらを貫く「子どもの視点」で、自ら考え、主体的に確実に改善を図っているか？指導主事は、それに添う助言ができているか。

　管理職試験でも質問した。何かをさせるときに主体的に動けるような指導・助言をする。

**○子どもの視点（ＡＬの視点）で、子どもの目線で授業する（具体的な姿から）。そのような先生で、県内を埋めつくしたい。**

**２　事例発表・報告（１３：３５～１４：３５）**

1. **平成３０年度市町村教育委員会の取組**

**＜発表１＞　宇佐市教育委員会　指導主事　　上田　積　氏**

１,２．学力分析

○県・全国学力調査の分析から　⇒　・読解力と説明する力に課題。

○県学力調査分析から　⇒　・学力の二極化（Ｃ層の出現が大きい）

　　　　　○思考力・判断力・表現力の向上を目指した組織的授業改善のさらなる充実が必要

　　　３．授業改善の力点

　　　　　○組織的な改善を目指す。

　　　　　○１人１指導案の取組　⇒　若手が増加している。

授業力向上のため、１年に１回は鑑からの作成をする。

　　　４．宇佐市における取組

　　　　　○自分の考えを伝え合う活動を取り入れた授業《説明する力の向上》

　　　　　　・板書とふりかえりの共有：児童生徒の意見を板書にどう位置づけるか。

　　　　　　・自分の考えが持てる課題の工夫：説明する必然性　→　考えてみたい課題

　　　　　　・一人で考える時間（５分）話し合う時間（１０分）の保障

→　話し合いが十分でない。または時間の取り過ぎてまとめまでいかない授業

　　　　　○考えのちがいを交流できる授業《学びに向かう力・説明する力の向上》

　　　　　　・「アウトプット型のめあて」（説明しよう、発表しよう、書こう、話そう）

の設定：相手意識をもたせるめあて　→　全教職員で理解

　　　　　　◇「考えをもつ」「表現する」意識の向上（アンケート結果より）

　　　　　○習熟度別コースガイド《個に応じた指導の充実》

　　　　　　・単元のはじめに見通しをもたせ、コース選択させる。

　　　　　○個人カルテ《個に応じた指導の充実》　→　８校／２４校が複式をもつ現状

　　　　　　・毎週末担任が、その週の学習状況について記録し、翌週の指導方向を記入。

　　　　　　・月一回の授業改善研修で情報共有。活用方法について検討中。

　　　　　○生徒による授業評価（生徒とともにつくる授業）《学びに向かう意欲の向上》

　　　　　　・学校全体のこととして、改善しようとしている。

　　　　　○近隣中学校教科合同研修部会《教科の専門性を高める》７校を２／２／３校に分割

　　　　　　・全教科で４点セットを設定　⇒　合同研修会で検証・改善

　　　　　○地球未来科の取組《思考力・判断力・表現力の育成》

　　　　　　・思考ツール

　　　　　　・ルーブリック（つけたい力を明確にし、児童・生徒と共有する）

　　　　　　・言語活動の充実。

　　　　　　・英語をツールとしたコミュニケーション力

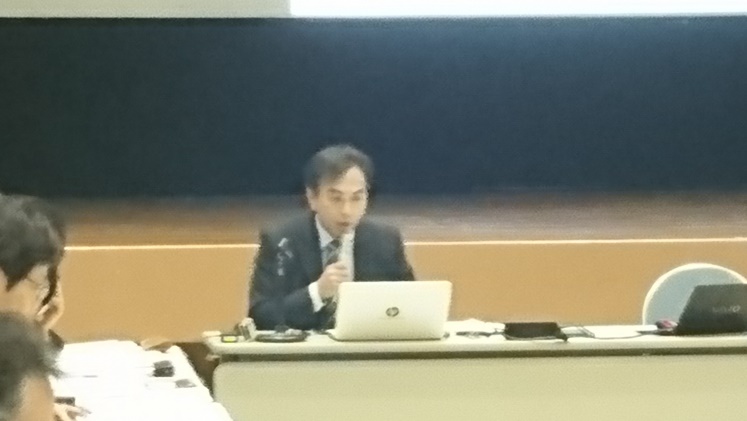
　　　　　　・総合的な学習の時間、生活科を通して主体的、対話的で深い学びを実現

　　　　　○幼児教育方小学校教育への円滑な接続を目指した取組

　　　　　　《自分の思いや考えを持ち、伝え合う教育活動》

　　　　　　・幼・保・小連携研修会

　　　　　　・公立幼稚園と小学校の連携による接続の研修　　　　　　　　※学校独自で工夫

**＜発表２＞　玖珠町教育委員会学校教育課長　　佐藤　貴司　氏**

・５０年前より人口半減

　・平成３１年度４月くす星翔中学校（旧森高校跡地）

1. 玖珠町学校教育の基本方針

　 ○ＣＳ導入で地域家庭との連携を充実させ、地域貢献できる子どもを育

てる

２．学力向上の取組

　　○「玖珠町学力向上推進計画」を策定。Ｈ２２より３年ごと。現在第３次。

　　　・学力向上推進班

⇒　基礎学力の向上、授業力の向上、生徒指導の充実、家庭教育力の充実を図る

　　　　　○学力向上に係る課題（全国・県調査より）

　　　　　　・小学校での活用力の向上　　・中学校での基礎基本の定着

　　　　　　・中学校英語での語彙の定着　・「読み取る力・説明する力・記述する力」の育成

　　　　　　・評価規準に基づく看取りと個に応じた指導

　　　　　　・補充指導や家庭学習指導の工夫

学力向上を目指した１２の取組

　　　　　○算数・数学確認テストの実施

　　　　　　◇目的　　：学習内容の定着状況を確認。

学級・個人のつまづきを把握、ポイントを絞った取組

町教委が分析、授業に反映

　　　　　　◇出題内容：教科書や問題データベース、全国・県調査を参考

　　　　　　　　　　　　下学年の問題も出題

　　　　　　　　　　　　該当学年で既習となった内容も順次挿入

　　　　　　　　　　　　正答率の低い問題は引き続き類題を出題

　　　　　　◇実施方法：全町統一日に年間４回実施（４，６，１０，１２月）

　　　　　　　　　　　　授業づくりにつなげる

　　　　　　　　　　　　町教委が原案

確認テスト推進会議（各校算数数学担当者で構成）で検討、修正

採点は学校、集計と分析は町教委

集計と分析結果の資料を各学校へ提供・説明

　　　　　　◇成果　　：つまずきの再確認（短期のサイクル）

　　　　　　　　　　　　子どもや先生の意欲へつなぐ

　　　　　　　　　　　　町全体での意識高揚

　　　　　　　　　　　　確認テスト推進会議　⇒　教科部会にもなっている

　　　　　　◇課題　　：下学年内容の補充学習の方法、時間確保

　　　　　　　　　　　　全校体制での取組の工夫・充実

⇒　担任・教科担当任せにならないように

1. **平成３０年度学力向上対策支援事業の総括**

**　＜報　告＞　大分県教育庁義務教育課学力向上支援班主幹　　松村　義広**

Ⅰ　第１回学力向上検証会議での確認

　　１「新大分スタンダード」に基づく組織的・計画的な授業構想と実践

　　　成果と課題

　　　□「めあて」「課題」「まとめ」「ふりかえり」の設定が定着

　　　□生徒指導の三機能を意識した問題解決的な展開の授業実施は進行中

　　　■教科等の特質を踏まえた「めあて」「課題」「まとめ」「ふりかえり」の質向上

　　　■個に応じた指導が十分でない。学習指導案に手立てを入れる。

　　　■内容や時間のまとまりを見通した授業改善が必要

　　　今後の取組

　　（１）　その学年で身につけるべき力を３月末までに確実に身につけさせるための学習指導

　　（２）　ねらいに対応し、ゴールの姿を具体的に描いた評価規準を設定。Ｃ層の児童生徒への習熟に応じたきめ細かい指導

　　（３）　教材や実践の記録の整理・保存・活用による「新大分スタンダード」の

ブラッシュアップ

　　２「中学校学力向上対策３つの提言」の推進

　　　成果と課題

　　　□ほぼすべての中学校が生徒による授業評価を実施、授業改善に反映

　　　□推進重点校の実践により、「タテ持ち効果」、日課表に位置づけた「教科部会」の効果的取組が明確になった

　　　■学習目標が学習規律でとどまっている⇒学校が目指す授業増を生徒と共有し、目標設定

　　　■３提言が進まない学校に対して、推進重点校の取組や県教委の作成した資料を基に推進

　　今後の取組

　　（１）　推進重点校の取組や県教委の作成した資料を活用した「３提言」の推進

　　（２）　「学びに向かう学校づくり」中核校の効果的な取組の共有及び活用による「生徒とともに創る授業」の推進

　　３　「中学校数学指導力強化巡回指導」による授業改善

　　　成果と課題

　　　□多くの教員が、第一回訪問での問題点を改善。「数学的な表現を用いて説明する」授業、「自分の考えを伝え合い、よりよく問題を解決する資質・能力を育成する」授業が増加。

　　　□巡回指導での授業に向けて、教科部会や担当同士で協議した授業の増加

　　　■学んだ「知識及び技能」を活用する授業を単元プランに位置づけ、増加させる

　　　■生徒の発表だけで終わらない授業構想

　　　■生徒の過不足な説明を生徒同士で指摘し合い、生徒自身で修正する活動を設定した

授業構想

　　今後の取組

　　　【３月末まで】

1. データベース「全国調査数学Ｂ類似問題」を活用した授業を通して、

「思考力、判断力、表現力」の育成

1. データベース「全国調査数学Ｂ類似問題」の「記述式問題」に焦点、生徒の説明の過不足を生徒自身で修正する活動を設定した授業実践

　【継続した取組】

（１）「数学的に説明する力」の育成に向けて、「説明の基本形」を活用して、問題解決の

過程を説明する授業の推進

（２）授業や単元の中で、生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか

という視点での授業改善

　※「年度末までに取り組むポイント」について、各校に伝える。

**３　協議（１４：４５～１５：２５）**

**○平成３０年度学力向上対策支援事業について**

**＜各市町村教育委員会・各事務所から＞**

１　「新大分スタンダード」に基づく組織的・計画的な授業構想と実践

　　　　○習熟の程度に応じた指導について

　　　　　【杵築市】

　　　　　・別府教育事務所と連携して、授業改善のチェックリストを基に各学校を指導し、習熟の程度に応じた指導については特に強化して行ってきた。

　　　　　・習熟度別指導推進教員については、様々な教具（カード等）を活用した授業を行い、若い先生方の参考になっている。

　　　　　【九重町】

　　　　　・町内の中学校は１校であり、習熟度別指導推進教員（数学）が配置されている。他教科では少人数指導は難しいが２人体制で授業を行い、習熟の程度に応じた指導ができるよう工夫している。

　　　　　・授業の中でどの生徒がどの学習場面で躓くのかを想定し、多くの教員が授業を行っている。

　　　　　・指導案に「『努力を要する状況』の児童生徒に対する手立ての工夫」を記載することで、日常的な支援につながるよう指導している。

　　　　　【別府教育事務所】

　・評価規準のＢに到達していない児童生徒に対しての具体的な支援の手立てを、必ず指導案に記載するよう各市教委に提案を行った。それを受け、管内のそれぞれの市町村で、更に具体的な部分まで検討していただきながら取組を進めている。

　　　　○問題解決的なプロセルの授業の推進について

　　　　　【日出町】

　　　　　・校内研修の時間に全国調査問題を解いて分析してみたり、県教育委員会がＨＰに掲載してある単元計画等を活用したりしながら、それぞれの授業者に考えてもらう時間を確保している。

　　　　　・年２回の互見授業を設定している。そして互見授業後に、それぞれが自分の実践を振り返ったり、教科部会で議論したりして深めている。

　　　　　【九重町】

　　　　　・小学校では問題解決的な学習が日常的に取り組まれており、その土壌がある。それが中学校でも意識的に取り組まれるようになってきた。（小中の接続）

　　　　　【別府市】

　　　　　・問題解決的な学習を生徒に説明させればよいと思っている先生もいるのではないか。問題解決的な学習のよい授業実践を見たことがない先生が多いのではないか。

・問題解決的な学習が成立しているときの児童生徒の姿とはどのような姿かを、具体的に整理しておく必要がある。

○効果的な取組

　【豊後高田市】

　・小規模校の学校が多い。そこで個々の児童生徒に対し、教職員の共通理解のもと、算数と数学の個人カルテを作成している。統一した様式はないが、進級や小学校から中学校への進学の際に、学習状況の申し送りとして活用している。

　　　　　・課題についても、全員一緒の課題を出すのではなく、個々の児童生徒の学習の状況に応じた課題を出すように各学校で工夫して取り組んでいる。

　　　　２　「中学校学力向上対策３つの提言」の推進

　　　　　【中津市】

　　　　　・校長会議の中で重点校の取組を発表していただいたことが有効であった。

　　　　　・大規模校には指導主事が月に１回は訪問し、学校の困りの共有や指導を行ってきた。

　　　　　・学力向上支援教員の先生にテーマに沿った提案授業をしてもらっている。その内容を市教委発刊の「中津学通信」の中で紹介をしている。

　　　　　【佐伯市】

　　　　　・推進重点校の課題として、これまで小学校との連携が不十分であった。そこで本年度は中学校の先生が小学校の授業を見に行くなど、小中の連携を意識した取組を行ってきた。

　　　　　【豊後大野市】

　　　　　・各学校が特色ある学校づくりを進めている。その報告会を毎年年度末に実施している。本音度は、各学校からの報告のみならず、地域の方を招いてのパネルディスカッションも行う予定である。推進重点校の取組も他校や地域への発信の場として予定している。

　　　　　・学力向上支援教員に公開授業の中で実践報告や先進地研修の報告などを予定している。

　　　　　【日田市】

　　　　　・３つ提言の「生徒と共に創る授業」、その中でも「学校が目指す授業像を生徒と共有し、それに向かう学習集団としての目標を設定させ、適宜振り返り活動を行う」という点が、管内の一番の課題である。

　⇒　教務主任、研究主任合同会議の中で、市内１２中学校の取組状況を報告。

　⇒　推進重点校の取組を報告し、市全体として取り組むことを確認。

　　　　　【臼杵市】

　　　　　・これまでも県外から講師を招き、学校長と市教委のベクトル合わせることの重要性や本質を見抜くことの大切さについて講義していただき、意識改革を行ってきた。

　　　　　　⇒　リーダーとなるべく先生に主体性が見られるようになった。

　　　　　　⇒　子どもたちも前に出るようになった。挑戦する姿が見られるようになった。

　　　　　　　　（例　科学の甲子園に参加　ロボットコンテストで九州大会出場　プレゼンテーションコンテストに参加　など）

　　　　３　「中学校数学指導力強化巡回指導」による授業改善

　　　　　【大分大学教育学部 川嵜教授】

　　　　　・活用力を高めるためにキーワードとなること

①言語能力の育成　　　②問題を解決するための資質能力の育成

　　　　　①言語能力の育成について

・数学も基本的には言語機能をもとにした活動であり、言語能力の育成は根底になければならない。

　　　　　・言語能力の４機能　：　話す・聞く　と　読む・書く

　　　　　・対話的な学習（対話が増える）⇒　話す・聞く力は伸びるが、数学の活用問題は書く力が必要である。

⇒　全体の対話を、個人の言語能力の育成つなげられる

　　かがポイントである。

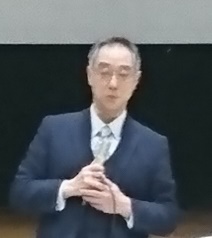
　　　　　・全体でできたからよかったではなく、個人がどのようにかけたか、個人がどのように説明できたかが大事である。

・数学の中の言語能力　⇒　数学的表現を使わなくてはならないので、表現の方法を整理する必要がある

②問題を解決するための資質能力の育成

・問題を解決的な授業をしたからといって、個人の問題を解決する資質能力が育成されたかというとそこが上手く連動しない。個人の問題を解決する資質能力が育成せれたかを確認する必要がある

・問題を解決する資質能力が育成されたかを確認する方法の１つとして、確認テストがあるが、解決のプロセス（説明）を書かせることが必要である。

**＜助　言＞大館市少年相談センター所長**

**元秋田県教育委員会参事兼義務教育課長　　髙橋　秀一　氏**

○型があるということはシンプル、力強いこと。型があるから先生たち

のアベレージも上がってくる。ただ、型はすぐに劣化する。なぜ劣化す

るかというと、良質な型ができたといっても、つくった人の思いや趣旨

が伝わっていないから。したがって、施策の効果を維持するためには、

型をつくり上げてきた人の思いを共有したり、語り合ったり、練り上げたりする作業を常に並行して行っていくことが大切である。

○例えば指導主事が学校訪問したときに、授業を見て指導講評はベクトルが一方通行になりがちである。それは型そのものを徹底させるやり方であっても、その型に込められて思いが語られないと先生たちと共有できない。共有できるためには授業者と「先生一緒に考えてみようか・・・」と言って、先生と共に作業することが大事である。

○生徒指導と学習指導は両輪というよりもまったく同じものである。

生徒指導の３機能　⇒　３つの**『**わ**』**　「笑い」「分かった、できた」「わくわく感」

　　　　　「笑い」（＝受容と共感）・・・学習活動の中で笑顔があるということ。そういう雰囲気が作られているか。

「分かった、できた」（＝自己選択・達成感・効力感）・・・子どもたちの何かしらの収穫があるかということ。

「わくわく感」（＝存在感）・・・「自分はここにいる」「ここにいてもいいんだ」という実感と安心感。引き込まれる授業。わくわく感のある授業。

※基本的に「３つのわ」があれば、授業としては大筋間違っていない。

○授業の中でＰＤＣＡＣサイクルをまわす。

Ｃは終末だけではない。授業のその場その場が常にＣである。子どもたちが下を向いたなと思ったならすぐにアクションをすればよい。決して前半にＰがあって、途中にＤがあって、終末にＣがあるのではない。

○指導案の意味

なぜ指導案を作って授業をするかというと、思わぬ反応が出てきたときのために、立て直しができるために検討しているものが指導案である。指導案通りすることが指導案の役割ではない。

○生徒指導の３機能

これは生徒だけのことではない。人が人として、大人になってもやる気が湧いてくるときには、まさにあの３つが必要である。「自分がここにいてもいいな」「受け入れられているな」という思いが、そもそも大切である。

○髙橋所長からの３つの提言

①授業の「ねらい」を大切にすること

授業で一番大事なのはねらいである。今日の授業は何をやるのか。教師の側の「指導目標」と学習者の側の「学習目標」は基本的に違う。本来は２つともあるが「指導目標のない授業は絶対にありえない」。

　　　　　②協働性を取り入れた施策の見直し

一緒にやるという意味の協働性。作業を通じて一緒に何かを作るという「協働性」を施策の中にもっと入れていけば、一方通行ではなくなりより施策が輝いてくる。

　　　　　　秋田県で実施している単元評価問題配信システムでも、システムについて「ここはどうなんだろうか」といった現場の先生の声が県に上がってくるように改善された。双方向性で事業を見直すことが大切である。

③開放性を取り入れた施策の見直し

例えば授業研究会をするときに近場の学校に、期日と内容を周知する。そして都合のつく先生はいつでもフリーに参加できるような体制にする。その結果、一人の優れた先生の授業や様々な授業を多くの先生と共有できる。

**※施策を増やすのではなく、今ある施策を３つの視点「協働性」と「双方向性」と「開放性」で見直すとよいのではないか。**

○いつの時代でも、「わかる授業」「魅力のある授業」が学校教育の根幹だと言われるが、それを鵜呑みにしない。学校教育というのは、そこに集団がいる。「主体的で対話的・・・」が成り立つのが学校でなくてはならない。そこに集団がいて「より分かり」「より魅力のある授業」とはどうすればよいのかと、私たち教師が計画することが大切である。

**４　説明・協議（１５：２５～１６：００）**

**○平成３１年度学力向上対策支援事業について**

**＜説明＞　大分県教育庁義務教育課学力向上支援班主幹　　松村　義広**

　　　　　　　　　　　　　次年度予算編成に関わることであるので割愛

**＜小学校における教科担任制について＞**

【大分市】

　　　　・一部の学校でローテーション道徳に取り組んでいる。教員の負担軽減のみならず、複数の教員が関わることで、児童生徒理解が深まったという声が聞かれる。

　　　　・小中一貫教育のモデル校で、教科の一部で教科担任制に取り組んでいる学校がある。

　　　【日田市】

　　　　・市内の２つの小学校で取り組まれている。その結果として教員の意識が学級経営から学年経営へと変わり、一人で悩むのではなく、学年部で教科指導等について話をするようになった。

　　　　・教員の教科の専門性も発揮され、一定の成果が見られる。

　　　【宇佐市】

　　　　・学力向上フロンティアスクールの頃より、市内の小学校で取り組まれている。毎年アンケートを実施しているが、保護者や児童からも教科担任制について「よいのではないか」いった回答が多く、結果として１５年以上継続している。

****

**＜助言＞　大分大学大学院教育学研究科教授　　山崎　清男　氏**

○髙橋先生の言われた「笑い」「わかった、できた」「わくわく感」は重要

な授業の視点である。

○ドイツの社会科学者マックス・ウェーバーは教育を象徴的暴力と呼んだ。

　　　　　教育　＝　恣意的権力による文化的地位の押しつけ

（例　親が子どもにワークを勉強しなさいと押しつける。無理

な要求をする。）

　　　　　　⇒　力のない子どもは親のいうことに従わざるを得ない（象徴的暴力）

　　　　○「笑い」「わかった、できた」「わくわく感」のない授業　＝　象徴的暴力

○学校教育が消極的暴力であってはいけない。消極的暴力にならないため授業はどうあればよいかを考え、議論し、必要であればシステムを作ることが大切である。

**５　講話（１６：００～１６：２５）**

**「学びにおける子どものエンパワメント**

**～東日本大震災６年間の学習支援を通して考えること～」**

**＜講師＞　大館市少年相談センター所長**

**元秋田県教育委員会参事兼義務教育課長　　髙橋　秀一　氏**

**エンパワメント**とは・・・子どもたちが自らの力に気づき、その力を発揮していくこと

　（１）これまでのボランティア活動

○震災後の平成２３年４月からボランティアに参加

○平成２３年１１月から、大館市から２５０km離れた岩手県陸前高田市で「子どもにも居場所と学びの場を提供する事業『学びの部屋』」の学習支援相談員として活動（平成２９年１２月まで）

　　○平成３０からは月に１～２回程度高田松原再生のための植樹活動に参加

　（２）大館市子どもサミットの活動

　　○震災直後に岩手県で子どもサミットが開催され全国から参加。大館市からも２名参加。

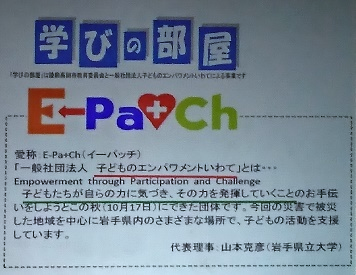
　　　・「地域のためにどんな活動ができるか」について話し合われた。

　　○参加した２名が、「自分たちにもできることはまだあるのではないか」という思いから、市教育員会と話し合いが行われ、大館市子どもサミットが立ち上げられ活動が始まる。

大館市子どもサミット テーマ　「地域の元気 人の元気 そのために自分たちにできることは」

・児童会、生徒会の活動として、ペットボトルキャップを収集する。

・加工業者を経て、プランターを釜石市の小中学校に送る。（現在も続けられてている）

　（３）学びの部屋での６年間

　　　愛称　E-Pa＋Cｈ（イーパッチ）

　　　子どもたちが自らの力に気づき、その力を発揮していくことの

　　　お手伝いをしようとこの秋にできた団体です。今回の災害で被

　　　災した地域を中心に岩手県内の様々な場所で、子どもの活動を支

　　　援しています。　　　　　代表理事　山本克彦（岩手県立大学）

○Ｙ君、Ｒさんとの出会い

Ｒさん（中２～高校）現在大学２年生

　◎高校３年生から少しずつ学習にも頑張れるようになった　⇒　大学合格

Ｙ君（中３～高校）現在社会人３年目

**※ その子にあった学習スタイルがある　⇒　その子にあった学習過程がある**

☆エンパワメントを重視した関わり

★自らの力に気づきその力を発揮していくこと

☆力（権限）を付与する、力をつける

**学びの部屋（時間、空間、仲間、隙間**）

**学校では無理？**

**授業では対応できない？**

○地域と向き合う子どもたち

震災後の平成２４年、岩手県の子どもたちに「あなたは、今住んでいる地域が好きですか？」というアンケートを実施。

**「好き」と回答した子どもたちの割合**

**県 全 体　44.4％（Ｈ２１）⇒　52.2％（Ｈ２４）**

**沿岸地域　37.2％（Ｈ２１）⇒　61.8％（Ｈ２４）**

○震災ボランティアの人たちへの感謝のメッセージ

⇒　中学生の書いた**生きる希望をありがとう** の看板

　　　女子中学生の**勉強して、勉強して、こんなときこそ人の役に立つ、人間になりたい**の言葉

**学校では対応できない？**

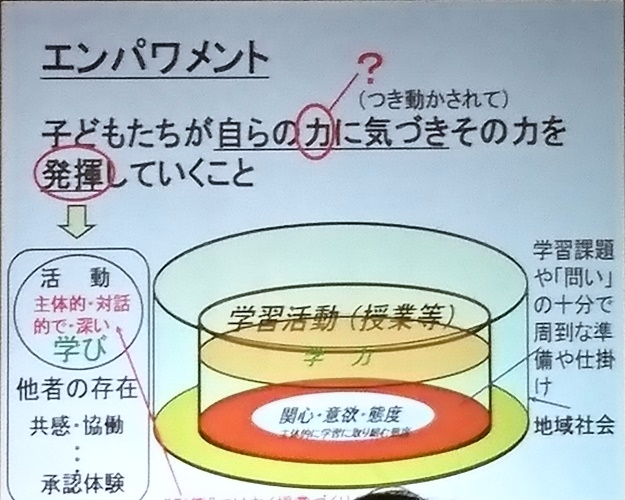
☆エンパワメント

★自らの力に気づきその力を発揮していくこと

☆力（権限）を付与する、力をつける

**個人や集団が、自分（たち）が自分（たち）のまわり環境を変えていくことのできる存在（主体）だと思えるようになっていくこと**

　○エンパワメントを授業で考えると

・関心、意欲　⇒　わくわく感

※先生が授業の準備を十分にすれば当然わくわ

くする。

・「主体的・対話的で深い学び」は文科省が言っ

ているから大切なのではない。当然当たり前の

視点。（型ではない）

これがないと学びの構築ができない。

・他者があるから、共感、協働し、自分という存

在が認められる。（基本的尊厳）

・地域と関わるように学校経営できれば

⇒　教育の質が変わる

トヨタの強さは「金太郎アメ」の強み

トヨタ生産方式を形だけ導入しようとしても成功しない。うまく機能させるためには、**カイゼン哲学**を共有し、不断の努力を続けなければならない。そして、その背景には、トヨタに脈々と受け継がれる労使間、社員間の徹底した**対話文化**がある。